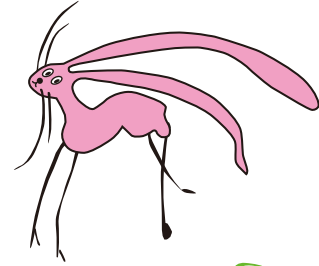


平安京跡・烏丸綾小路遺跡

調査期間：令和3年11月29日（月）～ 12月24日（金）

調査機関：京都市 文化市民局 文化芸術都市推進室 文化財保護課



1 発掘調査について

調査地は四条通と新町通の北西に位置しており、ここは「平安京左京四条三坊四町跡」及び「烏丸綾小路遺跡」に含まれます。

周辺では平成19年に発掘調査が実施されており、平安時代～江戸時代にかけての遺構・遺物が確認されています。なかでも、平安時代中期の園池遺構や中世の鍛冶関連遺物の存在は注目されます。本調査地はその南側隣接地で、平安時代中期の園池遺構の汀の延長線上に位置します。また、四条通に面していることから、中世以降は活発な商業活動のあったことが推測されます。

今回この場所で事務所の建築が計画されたことから、発掘調査を実施しました。調査区は計画地の東西と中央に各1か所ずつ、計3箇所設けました。調査面積は合計で42㎡です。

2 周辺の歴史

史料等によると、本町域には平安時代中期に藤原公任・頼忠の邸宅が所在したとされます。この邸宅は「四条宮」と呼ばれ、里内裏としても利用されますが数度の焼亡と再建を繰り返したことが判明しています。また、平安時代末期には本町域西半に右大臣源雅定の邸宅が所在していましたが、これも安元3年(1177)に焼失しています。

中世には本調査地付近は「四条町」として知られ、「七条町」とともに京都における商業活動の中心の一つとなります。切革・直垂・鎧・腹巻・引矢・太刀・刀・綾・綿・馬鞍などの様々な座（商工業者の組合）があったことが文献から分かります。また、室町時代の酒屋の名簿である「酒屋交名」によると、多くの酒屋が四条町周辺に所在しており、当時の活況を伺うことができます。

3 今回の発掘調査成果

調査では、西（1区）と東（2区）の調査区で比較的良好に遺跡を確認することができました。

まず、1区では室町時代の土坑やピットなどを確認しました。これらの中からは、鍛冶に使用されたと思われる鋳滓の付着した土師器皿やフィゴの羽口、砥石などが出土しました。また、調査区の北端では落込み26を確認しました（図1）。これは北側に向かってわずかに下がる落込みで、上面には礫が敷かれています。位置や標高の比較から、これは北隣接地の発掘調査で確認されている園池遺構の汀の一部と考えられます。

2区では、地表下0.25mと非常に浅い深度で遺跡を確認しました。時期は鎌倉時代～江戸時代にかけてのもので、種類としてはピットや土坑、柱穴、溝、石組み、埋め糞、落込みなど様々なものがあります。

今回の調査で確認した遺構を整理すると、本調査地は平安時代中期には、半町もしくは一町規模の大きな宅地の中であったと推測されます。続く鎌倉時代には、ピット群から、四条大路に面して小規模な建物が建っていた様相が想像できます。また、室町時代にはピットや柱穴、土坑、溝のほか、貯水又は貯蔵遺構と考えられる石組み等を確認しており、これらは出土した鋳滓の付着した土師器皿やフィゴの羽口、鋳型などの鋳造関連遺物と合わせて「四条町」に関連するものと考えられます。

江戸時代前期には、土取り穴と思われる土坑や大型の廃棄土坑、井戸と思われる石組み、礎石とこれに伴う地業の可能性のある土坑、土蔵に伴う布掘り地業を確認しており、店棚などが所在していたものと考えられます。

以上、本調査では小規模ながら平安時代～江戸時代までの活発な土地利用を確認できました。（熊井 亮介）

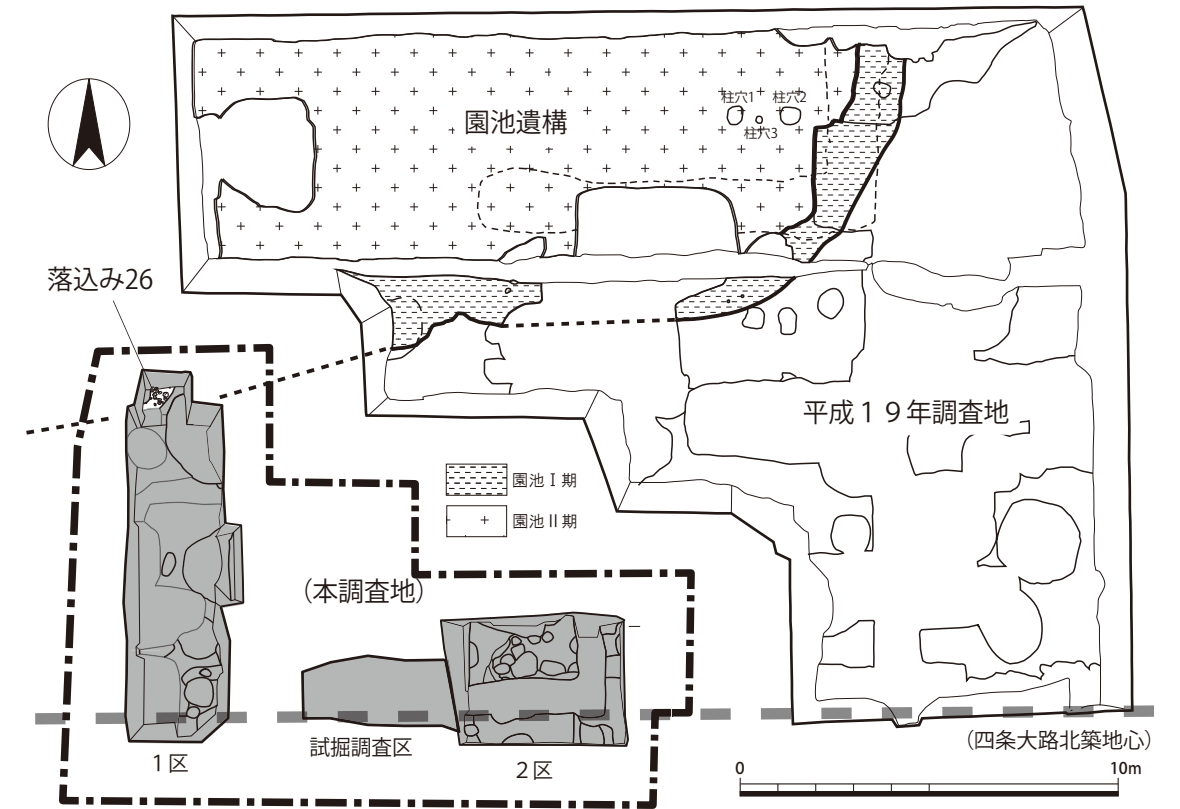


図1 調査区配置及び北側隣接地検出園池遺構の位置関係



図2 1区全景（南西から）※拡張前



図3 1区北側拡張部 落込み26（南東から）



図4 2区中世遺構群 全景（南西から）



図5 2区埋め糞出土状況（南西から）